



年間第 11 主日 (ルカ 7:36-8:3)

神の無償の恵みにわたしたちも心開く

今週の福音朗読は「罪深い女を赦す」物語です。罪が赦されるとはどういうことなのか、物語を通して学ぶことにしましょう。

先週の司祭叙階金祝記念ミサは皆さんの熱心なお祈りのおかげで、立派に終えることができました。萩原神父さまもとても喜んでおられ、帰りに皆さんへの感謝と、わたしへのねぎらいも添えてもらいました。ありがたいことです。次は何年後かに、浜崎神父さまのお祝いがあると思います。わたしはその頃には、次の神学生が誕生していればいいなあと願っております。

さてこちらに赴任する前から飲み続けておりました薬が無くなったので、青洲会病院に薬を処方してもらいに行きました。この先は作り話なので落語だと思って聞いてください。高橋という内科の先生に一通り診察していただいて、聴診器を当てた時に「気管支炎の兆候があります」と言われました。

全く身に覚えがないと返事をしましたら、「最近、誰かの指示を無視したことがありますか？」と聞かれ、「はあ、ナイターソフトでコーチが三塁でストップ！ストップ！と言っているのを無視して二塁から一気にホームに帰ったことがあります」と答えました。

「それですよ、それ。」何のことですかと続けると、「それはですね、『言うこと聞かんし炎』という病気です。これからはコーチの指示に従ってください。いいですか？」わたしは返事をしませんでした。

最後に看護師が「先生、お薬を」と言うと先生が「第三の薬を処方しておきましょう」と指示を出すと、「先生、そのお薬はもう処方済みのようです」と看護師が答えたので「では第四のお薬を」「承知しました」というオチでした。九割がた作り話ですが、いかがでしたか。

福音朗読に移りましょう。物語に登場する女性は、「この町に一人の罪深い女がいた」と紹介されています。小さな町であれば、噂は誰もが知っていることでしょう。誰もが、その女性に冷たい視線を向けていたのだと思います。しかし女性は、そうした冷たい視線を一身に浴びながらも、イエスの足元にひれ伏しました。

イエスはこの女性がどんな気持ちを表そうとしているのかご存知だったでしょう。後ろ指さされる生活をしてきた自分であっても、イエスの憐れみにすぐることができる。どこかで彼女はそのことを知り、自分がすでに憐れみをかけてもらっていると感じ、感謝の気持ちを表しに来たのです。彼女の行動は、「今からこれだけのことをしますので、赦してください」という態度なのではなくて、「すでに赦して下さっていることに感謝します」という態度だったのではないのでしょうか。

先週、萩原神父さまが今週の福音朗読を予感していたかのように、「ゆるしの恵みは、カトリック教会にしかありません。神が人の罪を赦すという驚くべき御業に司祭はたずさわります。こんなにすばらしい仕

事はありません。」そう繰り返して語っておられました。赦しは、神のいつくしみの最も発揮される部分と言えるでしょう。神にしかできないいつくしみの業に、人間に過ぎない司祭が関わることは、司祭職はなんとすばらしい道でしょう。

物語を進めましょう。食事の席を設けたファリサイ派の人は、イエスの姿に神のいつくしみを見たはずですが、彼はイエスに心を開くことができません。ファリサイ派の人にとって、罪深い女を近づけることだけでも許しがたい行為だったのです。罪深い人には近づかない。交わる人に線引きをして遠ざける。それが、みずからを宗教上の汚れに晒さない唯一の方法と考えていたからです。

ところがイエスは、罪深い女性が足元に飛び込んでくるのをお許しになったのです。「泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。」(7・38)これは、彼女の罪がイエスのいつくしみによって洗い流され、ぬぐわれ、ついには赦された者として香りを放つようになる姿そのものだと思います。

ファリサイ派の人が神のいつくしみを全く理解しないので、イエスは例えを示されました。現代であれば、一方は250万円、他方は25万円くらいの借金かもしれません。「二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」(7・42)彼は正しい答えを返しました。「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」(7・43)

人はなぜ、正しい答えを出せるのに、正しい行動が取れないのでしょうか。ファリサイ派の人は、イエスとお近づきにはなりたかったのですが、罪深い女のように足元に跪くつもりはありませんでした。女性が示した愛と従順を、正しい立派な行いだと認め、彼女と共にイエスの前に跪く。そこまでイエスに近づくことはできなかったのです。

なぜ正しい答えを出せるのに、正しい行動が取れないのでしょうか。それは神の恵みは無償であると認めないからだだと思います。神は正しい人には恵みを与え、罪深い人には恵みを与えない。頭のどこかにそのような考えがあるから、正しい答えを出せても正しい行動が取れないのです。イエスによって明らかにされた「正しい人以上に罪人を憐れみ、いつくしみと恵みで覆ってくださる神」は、認められないのです。

わたしたちはどうでしょうか。罪深い女性の罪を覆うほどの神の赦しの恵みを、認めることができるでしょうか。認めることができないでしょうか。認めることができないかもしれません。教会の決まりから大きく外れている人が神さまの赦しといつくしみをもらうのは虫が良すぎると、思っているかもしれません。

イエスは今日、わたしたちに「神の赦しは無償の恵みです」と示してくださいました。神さまが誰かの罪を寛大に赦してくださったとしても、正しいのは神さまであって、わたしたちではありません。洗礼・堅信・聖体・罪の赦しなど、神が与えてくださる無償の恵みを、わたしたちも心からたたえることができるよう、ミサの中で願ひましょう。